

“地域カリスマ”の活力に関する解釈学的研究： 「観光カリスマ」へのインタビュー調査を事例として*

A Hermeneutical Study on Vitality of “Regional Charismas”: From an Interview to “Charismas of Tourism”*

羽鳥剛史**・藤井聡***・住永哲史****

By Tsuyoshi HATORI**・Satoshi FUJII***・Tetsushi SUMINGA****

1. はじめに

地域づくりやまちづくりを成功に導く上で、ごく少数、場合によってはたった一名の“地域の問題に熱意を持って取り組む人”の存在が極めて重要であることが経験的に知られている(羽鳥・藤井, 2008¹⁾)。事実、国土交通省は、様々な地域の観光振興に尽力した人々を選定する“観光カリスマ百選”選定委員会を平成14年～16年度に設定し、その中で“100人のカリスマ”を選定している(国土交通省, 2005²⁾)。ここで選定された“カリスマ”はそれぞれ地域固有の問題に向き合いながら、地域のために献身的に振る舞い、地域振興や観光振興に多大なる貢献をなしている。

それでは“観光カリスマ”を地域への献身的な活動に突き動かした“活力”とはいかなるものであったのであろうか。無論、ここに言う活力とは、物理的な力というよりも、人間精神そのものであり、「生そのものが力への意志である」と論じたニーチェに倣えば、それは人間の“^{レベ}生”に他ならないものと言い得る。地域の問題に直面し、様々な苦勞を経ながらも、決然たる意志をもって事態を打開する精神の在り様にこそ、“カリスマ”の活力の本質があると言えよう。ただし、そうした活力なるものを理解するにあたっては、そこから確証された認識を構築するような、所謂「アルキメデスの点」は存在せず、“カリスマ”の活動する現実世界から隔絶した視座からその活力を理解することは著しく困難(あるいは原理的に不可能)であるという点が危惧される。

なぜなら、例えばディルタイらによる解釈学上の哲学的議論を踏まえるなら、人間の生や力とは本来的に、現実世界の中で自己を理解すると同時に、自己が生きるところの現実世界を理解していくことでしか自己や世界を理解し得ぬような解釈的存在であると言わざるを得ないからである。それ故、我々は現実世界の中にあつてはじめて、当該の“カリスマ”の活力、あるいは、生や力を理解すると同時に、他者に伝達可能な形で記述する可能性

*キーワード：地域計画、観光カリスマ、解釈学

**正員、工博、東京工業大学大学院理工学研究科
(東京都目黒区大岡山2-12-1、

TEL: 03-5734-2577、FAX: 03-5734-3578)

***正員、工博、京都大学大学院都市社会学専攻

****正員、工修、(株)大林組生産技術本部

を手にすることができるものと期待されるのである(ディルタイ, 1981³⁾)。それ故、“カリスマ”の活力を理解する上では、研究者自身が、カリスマが住まう現実世界に降り立ち、その社会の常識の共有を図りながらも、その上でなおかつ客観的な立場¹⁾から“カリスマ”の経験を解釈することが重要であると考えられる²⁾。そして、“カリスマ”の生きる経験とはそれ自体が解釈の産物であることを踏まえれば、以上のことは「解釈を解釈することとも言い換えることもできよう。そうした方法論は、実証主義を批判したシュライエルマッハーやディルタイに端を発し、これまでシュッツやリクール、そしてガダメーやギデンズらによって支持されてきた「解釈学的方法」と呼ばれるものである(c.f. ボルノー, 1991⁴⁾, ギデンズ, 2000⁵⁾)。

以上の問題意識の下、本研究では、前述の“観光カリスマ”へのインタビューを実施し、そこで語られた「生の体験や経験」を解釈し、それを物語的に記述することによって、“カリスマ”をその活動に突き動かした活力への理解を深めることを試みる³⁾。この目的の下、国土交通省によって“観光カリスマ”に選定された斎藤文夫氏(川崎市観光協会連合会会長)、加藤文男氏(千葉県南房総市企画部長)、船木上次氏(萌木の村(株)代表取締役社長)の三名にそれぞれインタビューを行った。

2. 事例

本章では、インタビュー調査を踏まえ、筆者ら自身の解釈を通じて、三名のこれまでの経験を記述することを試みる。

(1) 斎藤文夫氏：“東海道川崎宿復興に情熱を注ぎ、川崎のイメージアップに挑むカリスマ”

かつて東海道の宿場町として栄えた川崎は、明治時代を境に、産業の要地として脚光を浴びるようになり、多くの工場が立ち並び、日本の近代化を牽引する産業都市にまで成長した。その一方で、観光の面では目立った取り組みがなされず、いつしか川崎は「観光不毛の地」、「文化不毛の地」という不名誉な名で呼ばれるようになった。そんな中、斎藤氏は、1994年、川崎大師観光協会会長に就任することとなるが、同氏は当時を振り返り、「文化不毛の地川崎をいかに文化度の高い街にするか」が何よりの課題であったと語っておられた。

しかし、川崎には誇るべき観光資源が存在しないわけではなかった。

それどころか、川崎には、江戸時代に東海道川崎宿として多くの旅人が往来し、様々な偉人や史実に彩られた歴史がある。例えば、江戸時代に甘蔗糖の農地開発に尽力し、時の将軍吉宗から感謝状を贈られた池上幸豊や、呉服商人の身分にありながら、多摩川の氾濫を防ぐために、幕府に民間省要を建白し、見事に改修事業を成し遂げ、その功により2万石の大名となった田中丘隅をはじめとして、川崎には様々な偉人が輩出されており、そうした人物にまつわる様々なエピソードや史実も残されている。また、奈良・平安時代には、旧街道が川崎を通過していたと伝えられており、官衛（かんが、役所跡）や古墳等の遺跡も発掘されている。しかし、斎藤氏は、「自分の住んでいる街にどういふ誇りの持てる歴史があるかということを知りたい」という指摘にも示されるように、住民が川崎の歴史や文化を忘れつつあることに強い危機感を抱いておられた。そして、後述する斎藤氏の一連の活動の背景には、自分の住む地域において、そうした歴史や文化が培われてきたことは誇り得ることであるという認識を住民に持ってほしいとの思いがあったことが、インタビューを通じて窺い知ることが出来た。

さて、川崎大師観光協会会長に就任した斎藤氏は、そうした思いを携えつつ、川崎の歴史や文化にまつわる様々な取り組みを企画・運営し、川崎の観光振興に取り組んできた。まず、斎藤氏は1996年から毎年7月に、川崎大師の境内で「風鈴市」の開催を始めた。この風鈴市では、全国から風鈴を取り寄せ、展示、販売をし、現在では川崎大師の夏の風物詩として定着し、多くの観光客を集めている。その他、昭和レトロの街並みを再現し、メンコ、ベイゴマ、竹馬等の昔ながらの子供の遊びを体験する「楽大師」や、地元の故事に倣い、酒飲み合戦を実演する「水鳥の祭り」等、様々な催しを定期的に企画・開催し、これらもこの地域に根付きつつある。さらに斎藤氏は、川崎大師の歴史や文化を賑わいのある街づくりに活かそうと地元の有志を集め、2000年に「川崎大師観光ガイドの会」を発足させた。その後、斎藤氏はこの会を発展させる形で、「かわさき歴史ガイド協会」を発足させその運営に尽力してきた。

そして、2001年には、斎藤氏が中心となり、東海道川崎宿の復興を願って「大川崎宿祭り」が開催された。この年は、東海道宿駅制定400周年に当たる年であり、斎藤氏は「東海道川崎宿に対する地元の人々の認識を高めたい」との思いから、地元の有志を募って「大川崎宿祭り」実行委員会を組織し、自ら旗振り役となり、イベントを企画し、その実行に尽力した。この祭りでは、川崎宿を代表する「万年屋」を再現し、六郷橋の袂で「六郷の渡し」を復活させ、伝統芸能の演芸会や展覧会を開催する等、様々なイベントが実施された。その中でも、川崎競馬場から八丁塚までの沿道を15万人の人が埋め尽くす中で、大パレードが実施され、江戸時代の大名行列を再現した歴史仮装行列が市民の参加により実現された。このパレードは、川崎市市民レベルの行事としては前例の無い壮大な催しであった。この仮装行列について、斎藤氏は「この東海道をかつて通っていた大名行列を自分達の祖先が拝みながら見送っていた姿を子供時代からよく想い描いていた」と述懐されており、川崎宿の歴史や自分たちの祖先に対する深い思いを述懐されている。そしてこの祭りを通じて、地元を中心に、「東海道川崎宿を活かした地域活性化方策検討委員会」が立ち上がり、この祭りがその後の川崎宿復興に向けた様々な運動のきっかけとなった。

斎藤氏はこのようなイベントの企画運営に精力的に取り組む傍ら、2001年には旧東海道に面した自宅の前面を、自ら私財を投じて江戸風のなまこ塀を模した壁に改装し、浮世絵の資料館「砂子の里資料館」を開設している。この改装工事について、斎藤氏は「川崎宿の街並みや雰囲気を持続し、後世に伝えることがそこに住む者にとっての重要な責務である」と語っておられ、ここに同氏の一人の歴史的社会的存在としての強い義務感が感じられるが、そうした思いは周囲に少しずつ浸透しつつあり、斎藤氏の取り組みを受けて、店構えや看板を立て替えるお店も

出てきているとのことである。また、この資料館では、趣味として収集した浮世絵が無料で公開されており、毎月展示の企画を行い、カラー刷りのパンフレットも自分で作成し、見学者に無料で配布している。

このような功績から、斎藤氏は川崎市観光協会連合会の会長に推薦された。そして、2003年4月に会長に就任した斎藤氏は、以前にも増して川崎市全域にわたる観光振興に精力的に取り組むこととなる。まず、当時観光協会が無かった幸区及び宮前区に地区観光協会を設立した。そして、川崎を訪れた人に「川崎にも観光場所がある」という認識を少しでも持ってもらうと、川崎市内の駅前に観光案内所や案内パネルを設置した。そうした斎藤氏の尽力の甲斐あって、現在では観光協会がお互い切磋琢磨し、区や市の行政と協力して、観光案内パンフレットやポスターを積極的に作成・配布する状態となっている。また、市制80年を迎えた2004年には、再び斎藤氏が中心となり「大川崎祭り」が開催され、3年前の大川崎宿祭りを超える人々が訪れ、大きな賑わいを見せたとのことである。

この様に、斎藤氏が川崎の観光振興に尽力した背景には、川崎の歴史に対する深い思い入れの下、先人から引き受けた歴史や伝統を何とか後世に残したいとの強い思いがあったことはこれまでに述べてきた通りである。ただし、そうした観光振興の任に就くにあたっては、必ずしも自ら進んで申し出ているわけではないようである。このことについて、斎藤氏は「何も役職が好きで引き受けている訳ではないのです。やはり人間関係ですよ」と語られていた。斎藤氏には周囲から多くの期待が寄せられており、依頼や陳情が跡を絶たないが、信頼関係を第一と考える斎藤氏はそうした依頼を無下に断ることは容易ではない、とのことであった。ただし、これまで培われてきた人間関係は、斎藤氏の数々の取り組みを成功させる上での支えともなっているように見受けられる。大川崎宿祭りをはじめ、斎藤氏の企画の多くは、なるべく業者に委託せず、自前で行っているそうであるが、その背景にはそうした信頼関係に裏打ちされた惜しみない協力があつたとのことである——卓越した歴史感覚に裏打ちされ、逃れ難き人間関係からの要請に応え、そうした人間関係に支えられながら、斎藤氏の多大な貢献が生まれたと言えそうである。（インタビュー時期：2008年11月29日）

（2）加藤文男氏：“道の駅と広域連携のカリスマ”

千葉県富浦町は房総半島の南西端に位置する人口5,700人の小さな町で、房州枇杷や花卉等の温暖な気候を活かした農産物が地域の特産である。富浦町は、昭和50年代の初め頃までは、一夏に50万人近くの観光客が訪れ、毎年夏になると東京湾に面した砂浜は海水浴客で賑わっていた。しかし、農産物の輸入自由化、バブル経済の破綻により、基幹産業であった農業や漁業の衰退に拍車がかかり、少子高齢化による過疎化も深刻化した。さらに、全国の高速度道路の整備が進捗するに伴い、富浦を訪れる観光客は20万人近くにまで落ち込んでいった。

そうした厳しい状況の中、「座して衰退を待つのではなく、一気果敢に打って出る」との町長の決断により、1990年、富浦町に「産業振興プロジェクトチーム」が設立され、その指揮を命ぜられたのが、地元の高校を卒業して以来ずっと富浦町役場に勤めておられる加藤文男氏であった。町長からの命令は、地域の産業と文化、情報化の振興拠点となる施設を整備し、尚且つ事業の採算を合わせる、という極めて困難なものであった。加藤氏は、当時のことを振り返り「どうやって運転資金を集め、原料を仕入れ、商売を行い、そして利益を出していくのか、一切分からなかったですね」と述懐されていた。

それでも、「自分達の住んでいる地域は、本来、これほどまでに疲弊する地域ではない」と認識されていた加藤氏は、「手には余るけど、これしかない」との強い決意の下、1993年、千葉県で初の「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」をオープンさせ、その初代所長を務めると共に、その

運営母体として町が全額出資した「(株)とみうら」を発足させた。そして「枇杷倶楽部」を拠点として、採算性に配慮しつつ、産業、文化、情報と段階を追って少しずつ事業を積み上げていった。まず、地域の産業を巻き込み、富浦の特産を活かした花摘み、枇杷狩りの観光化を進めると共に、苺栽培の導入に取り組み、年間を通じて観光客を誘致できる観光づくりを目指した。また特産の枇杷の商品開発に取り組み、観光客への販売や周辺観光地への卸販売、ネット販売を積極的に展開した。さらに、地元の店舗や事業者の連携を図り、それまで広く分散していた観光資源を束ねることによって誘客を図る「一括受発注システム」の開発を進めた。その上で、地域に根ざした文化事業として、地域に住む自然や歴史の専門家アドバイザーの案内・指導の下、富浦の自然や文化を体験する「ウォッチング富浦」や、南房総で地道な活動やユニークな活動をしている方のお話を聞く「枇杷倶楽部茶論」が加藤氏の指揮の下で実現化された。これらの取り組みは現在も定期的に行われており、2009年7月時点で、「ウォッチング富浦」は203回、「茶論」は160回を数えるまでに至っている。さらに、富浦では昭和63年より地元まつわる人形劇を地域に根付かせる「人形劇の郷」づくり事業が開始されたが、加藤氏はこの事業を発展させる形で「富浦人形劇フェスティバル」の企画・運営に主体的に取り組みされた。このフェスティバルは毎年夏に開催されており、今年で21回目を数え、富浦を代表する恒例事業となっている。そして、情報化の拠点として、加藤氏が中心となって、枇杷倶楽部のイベントや地域情報等を発信するポータルサイト「南房総いいとこどり」が導入された。この取り組みでは、役場職員がホームページ1頁を無償で作成する「1世帯1ホームページ運動」を同時に展開し、インターネットに馴染みの薄い農家や高齢の事業者に歓迎されている。

加藤氏は、12年の歳月をかけてこれらの事業の企画、提案し、その実行においても中心的な役割を担い、それぞれの事業を軌道に乗せることに成功した。そして、このような加藤氏を中心とした「枇杷倶楽部」の一連の取り組みが功を奏し、年間20万人にまで落ち込んでいた富浦の観光客数は現在100万人を超え、またそれまでの夏一季型から、年間を通じて観光客が訪れる地域となった。

この様に、様々な事業を着実に推進してきた加藤氏であるが、これまで必ずしも順風満帆に事が進んできたという訳ではなかったようである。加藤氏は「自分達がどんなにこの地域に対する情熱を持って、世間のすべての人から評価されることはない。むしろアゲンスト (against) の風が吹いてきましたね」と語られているように、一部の人々からの様々な批判があったようである。特に、枇杷倶楽部のような集客施設に観光客を誘致すると、その分だけ、周囲の店舗の売上げが下がる可能性があり、そうした人々の理解を得ることは極めて困難であり、加藤氏曰く「今でも完全に理解が得られているかどうか分からない」とのことである。また、議会での一般答弁の矢面に立たされた時には、お金の無駄遣い等、様々な批判に曝されたとのことである。それでも反対者の意見を大事にした上で、他の人たちの期待に応えていくという活動が続けてきたのが、この12年間であったと加藤氏は振り返っておられた。

しかし、そうした逆風の声は、必ずしも加藤氏の意志を打ち砕くものではなかったようである。むしろ「批判があった方が工夫するし、批判があった方が頑張れる」と加藤氏は語られているように、そこには逆風に負けんとする猛々しさが感じられた。そして、「世の中の人というのはね、自分が思うように評価する訳じゃないし、それが世の常だろう。仕方がない」と認識されていた加藤氏は、それでもこの事業を成功させる以外に富浦の生き残る道はないという強い信念があったようである。そして、何より、加藤氏にとって枇杷倶楽部と共に働く人達の存在が大きかったようで、そうした人達に支えられ、「誰と勝負しているか、誰と闘っているか分からなかったけど、この勝負勝てる」と直感的に認識

されたそうである。それと同時に、一緒に働く人々を含め「この事業を守っていかねばならない」と強く感じられたとのことである。

加藤氏ご自身が語られているように、「前例がなく」、「誰もやりたがらない」、そして「楽しかったけれど、2度とはやれない」、それほどの仕事をやり遂げてこられたのは、逆境に負けない反骨の精神と守るべき地域の価値があったためではないかと思われる。(インタビュー時期：2008年12月8日)

(3) 船木上次氏：“開拓魂のカリスマ”

山梨県清里は、1938年、東京都の水瓶となるため小河内ダムの湖底に沈んだ村を追われた人々によって開拓された。当時、荒涼とした清里の原野を開拓する人々を支えたのは、後に「清里開拓の父」と呼ばれるポール・ラッシュ博士であった。キリスト教伝道師として来日していたポール・ラッシュ博士は、清里の地に理想の農村を実現するため、アメリカの各地で募金活動を行い、資金を集め、農村センター、農場、診療所、図書館等を設立した。農村センターの農場長の息子として生まれた船木上次氏は、この清里の地で自分の父親とポール・ラッシュ博士、そしてセンターのスタッフに囲まれて育った。船木氏の活動の原風景には、彼らが貧しい中にもあっても生き生きと働いていた姿が焼き付いているとのことである。

1971年に、東京の大学を中退し、清里に戻った船木氏は、地元の若者が語り合える溜まり場を作ろうと、喫茶店「ロック」を開店した。そして、「ロック」の経営が軌道に乗った頃、ホテル「ハットウォールドン」をオープンさせた。ちょうどその頃から清里では急激なリゾート開発のブームが到来し、次々とペンションがオープンすることとなった。高原の豊かな自然景観と、ポール・ラッシュ博士に始まる開拓の歴史が女性誌を中心にメルヘンチックに取り上げられ、突如脚光を浴びるようになったのである。そして、10年間で100軒を超すペンションが立ち並び、いつしか清里は「ミニ原宿」と呼ばれるようになった。

しかし、船木氏は、ブームに乗って無秩序にペンションが立ち並ぶ状況を目の当たりにして、「このままでは清里が個性のない観光地になってしまうのではないか」という強い危機感を抱いたようである。今回のインタビューでも、「みんな便利さと経済力だけを追求して、本来手に入れなければいけないものを忘れてる」、「多様な価値ではなく、一つの価値で色々なものを測って、それをモデルとして、そしてそれが正しいと決めつけているような気がしてならない」と語っておられた船木氏にとって、清里のリゾート開発のブームは、清里本来の価値を損なうものに映ったようである。そして、船木氏は、地域において様々な価値観が混在しながら、あるべき方向に向かっていくことが重要であると考え、そうした理念を実現する受け皿として、1977年に「萌木の村」を設立した。「萌木の村」は、手作りの工房を中心にして、地道にものづくりを続ける若者に活動の場を提供することから始まった。

平成の時代に入ると、船木氏が危惧していた通り、清里の開発ブームは、バブルの崩壊と共に終焉を迎え、観光客も徐々に清里から離れていった。ペンションの経営者も元々ブームに単に便乗していただけのこともあって、そうした事態に為す術もなく、清里の地を去り、徐々に清里の町は寂れていった。

一方、船木氏は、清里に本当の文化を根付かせることに意欲を燃やし、「萌木の村」で地道な活動を続けていった。素焼き、レザークラフト、彫金の店舗から始めた萌木の村は、その後、ホテル、地ビールレストラン、オルゴール博物館等の事業を展開していき、現在、萌木の村の年間入場者数は40万人にまで上り、清里への集客を担っている。

その中でも、「萌木の村」の特設野外劇場で毎年夏の夜に2週間開催される野外クラシックバレエ公演「清里フィールドバレエ・コンサート」は、大きな人気を博している。1990年に始まったこの取り組み

も、現在では一万人を集めるまでになり、夏の大イベントとして定着している。今回のインタビューでは、船木氏よりこのイベントに関する一つのエピソードをお伺いした。それは、2008年の公演のことである。全盲の来場者が、クラシックバレエの音や雰囲気を感じたいと訪れたそうである。船木氏は驚きながらも、その人のために舞台の袖で鑑賞できる席を特別に手配した。本番が終わり、その人が船木氏のところへお礼を言いに来た時のことを回顧されて、船木氏は次のように語っておられた—「最後にその女性が俺のところに来て、お礼を言うのだけでも、手を握って、今日は本当に楽しかったって言って、ぎゅって手を握られた瞬間、俺は自分のやっていることに生きがいを感じるわけ」。船木氏にはポール・ラッシュ博士という偉大な先人の記憶が今も生き生きと残っているように、「その人の中にクラシックバレエの記憶が一生残っていることが何よりも嬉しい」と、船木氏は語っておられた。

この様に、時代の変化の影響を様々な形で経験してきた清里にあって、船木氏は独自の活動を続け、観光振興に貢献されてきたが、そこには船木氏の観光に対する透徹した哲学があったように見受けられる。船木氏は、観光振興を「必然を作ること」と捉えており、ここに「必然」とは「地域にあるものに適切な物差しをあてること」であると位置づけられておられる。つまり、船木氏にとって、観光振興とは地域にあるものに価値を見出すような物差しを見つけようとする営為に他ならない。そして、船木氏は、地域の住民が地域固有の物差しに誇りを持っていることが、本当の幸せであると主張されている。一個人が自他共に認める個性を持つことにその個人の幸せがあるように、地域がそこにあるべき必然の物差しを持つことにその地域の幸せがあると語っておられた。それは、効率性や利便性という一元的な物差しとは異なり、清里の歴史や自然を徹底的に調べた末に初めて見つけられ得るものであると船木氏は考えておられた。その反対に、世間の流行や他の地域から表層的に模倣した物差しは偽りであり、それはやがて自己欺瞞に陥り、地域に根付くことはないとの認識を持たれておられた。ここに、自己に誠実にあらんとする船木氏の徹底した姿勢を感じ取ることが出来る。

先人の意志を引き継ぎ、激動する清里において、必然という物差しを探求し続け、人々に感動を与えんとする船木氏の姿に、氏自身が築き上げてきた人生哲学を垣間見ることが出来るように思われる。(インタビュー時期：2008年12月13日)

3. 活力はどこから生まれるのか？

(1) “Active Passiveness”の精神

今回のインタビューを通じて、斎藤氏、加藤氏、船木氏の各氏がそれぞれ地域の問題に取り組むに至った背景には、地域の歴史や周囲の人間関係、先人の意志といった何かしら個人を超越した「外部」からの要請があったことを窺い知ることが出来る。少なくとも、各氏が経験されてこられた幾多の困難や相当な労力を鑑みれば、各氏がその個人的動機から自ら進んで地域への取り組みを始められた訳ではないように見受けられるところである^[4]。

しかし、このことは、各氏が、ただ単に自らに課された要求に受動的に従っていることを意味するものでは決してないと言わなければならない。むしろ、そうした外部からの要請を察知する開かれた精神を宿し、それを引き受けることを自らよとした決断があったからこそ、長年にわたって、地域を常により良くしようと意志

する自発的な活力が途切れることがなかったのではないだろうか。

以上の点を踏まえると、各氏は、自らの外部からの要請を積極的に感知し、それに応える、言わば「積極的受動性（“active passiveness”）」とも言うべき精神的態度を有していたのではあるまいか。斎藤氏は、川崎の歴史を感受し、その歴史を後世に伝えようと積極的に働きかけてこられた。加藤氏は、観光集客の衰えの回復という地域全体からの期待を背に受けつつ、地域における対立関係に向き合いながら、それを克服する方途を探ってこられた。船木氏は、ポール・ラッシュ博士の意志を受け継ぎ、地域のあるべき必然を探索し、それを具体的な形に現実化しようと取り組んでこられた。各氏のそうした「積極的受動性」の精神にこそ、活力が生ずる契機があるように察知される場所である。

(2) 活力の弁証法的展開

今回のインタビューからも推察されるように、“カリスマ”の生きる現実世界には様々な対立関係や矛盾関係があったものと考えられる。斎藤氏においては、川崎の歴史的過去と現代の姿との間に葛藤があり、加藤氏においては、地域における利害の葛藤があり、そして船木氏においては、地域に対する様々な価値観の葛藤があったものと見受けられる。ここで、前述した「積極的受動性」の態度は、そうした現実の矛盾を一手に引き受けんと意志することに他ならないと言えるのではないだろうか。そして、各氏が現実の矛盾を引き受け、それを乗り越えようと献身的に活動されてきたところを鑑みれば、そうした矛盾や対立を克服せんとするところに各氏の活動の原動力があったのではないだろうか。このことは、様々な対立価値を乗り越えようとする、言わば弁証法的運動にこそ、地域の“カリスマ”の活力の本質があること示唆しているものと考えられる。そして、そうした弁証法的運動があつてこそ、“カリスマ”個人の活力が、地域全体の活力となり、それがやがては地域の歴史を形成する原動力となっているのではないかとと思われる次第である。

[1] この立場は、ヒュームが重視した「公平な観察者」の立場とも呼べるものである。

[2] それは、さながら共同関係においてお互いに協力しあう中で相手が理解されることに見られるような、それ自体実践的意味合いを含んだ行為であると考えられる。

[3] シュライエルマッハー(1984)⁶⁾は「語る者が目の前にいること、彼の精神的存在の全体が賭けられているような生き生きとした表現、ここで思想が共同生活の中で展開されていくさま、これらすべて」が「生の瞬間」に対する理解を促すことを指摘している。本研究の目指すところも、そうした記述行為であると言える。

[4] 筆者には、そうした苦難にも関わらず、地域に献身するこ

とを決断した“カリスマ”の姿に、ソクラテスが論ずる
「万やむを得ない強制と考えて、そこへ赴く」国家の守護
者の姿と相重なるところが少なくないように感じられる。

謝辞：インタビューをお引き受け頂きました斎藤文夫氏、加藤
文男氏、船木上次氏には、多大な協力を頂いたことを付記
し、ここに深甚なる謝意を表します。

参考文献

- 1) 羽鳥剛史・藤井聡 (2008). 地域コミュニティ保守行動に関する進化論的検討：階層淘汰論に基づく利他的行動の創発に関する進化論的検討 社会心理学研究, **24** (2), 87-97.
- 2) 国土交通省 (2005). 『観光カリスマ百選』.
http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha05/01/010318_4.html
- 3) デイルタイ(著), 久野 昭 (訳) (1981). 解釈学の成立, 以文社.
- 4) オットー・フリードリヒ・ボルノー(著), 西村皓・森田孝(監訳) (1991). 解釈学研究, 玉川大学出版部.
- 5) アンソニー・ギデنز(著), 松尾精文・藤井達也・小幡正敏 (訳) (2000). 社会学の新しい方法規準—理解社会学の共感的批判, 而立書房.
- 6) シュライエルマッハー(著), 久野 昭・天野雅郎 (訳) (1984). 解釈学の構想, 以文社.